ART TAITO-KU 09

Taito-ku
Art Project
Archive
2008→2017

平成21年度

企画

- 下谷万年町物語
- おやつテーブル「板間の間」
- 続・続・続（ゾク・ゾク・ゾク）展（P10）

短評

日本家屋での現代ダンスや、前年度に続きエントリーのあった『続・続・続（ゾク・ゾク・ゾク）』展など、台東区ならではの魅力を引き出した企画が採択された21年度。また、初の演劇ジャンルには、全国的な活動を行う劇団唐ゼミ☆が選出。特設テントを使用し、100名近い出演者という大規模な企画は、過去最高の支援金額に。この審査後、「良い企画はしっかりと支援すべき」という考えが審査員一同に定着しました。

Title
下谷万年町物語

主催者
劇団唐ゼミ☆

開催期間
2009.10.23—26、10.30—11.03、11.06—08

会場
浅草花やしき裏特設テント劇場

会場入口

幻の大作、28年度の時を経て浅草で復活！！

「劇団唐ゼミ☆」は、台東区出身の劇作家唐十郎が横浜国立大学教授を務めていた時に開かれたゼミナールをもとに2005年に発足した劇団です。横浜・東京を中心に全国各地でオリジナルの青テントを用いて、劇作家唐十郎の作品を上演しています。『下谷万年町物語』は、唐十郎氏の幼少期を綴った自叙伝的作品。子ども時代に過ごした長屋や路地裏、遊び場であった浅草が物語の主な舞台となっており、長らく演劇界では待望されながら再演不可能と言われていました。1981年に蜷川幸雄演出による初演は、長屋を再現した豪華絢爛なセット、100人を超えるキャスト、本水を使った仕掛けが渋谷のパルコ劇場に登場し、強烈なインパクトを残したと言われています。今日の日本の演劇界を支える多くの俳優・スタッフが巣立っていった、まさに伝説の公演でした。そのあまりの壮大さのため長らく再演不可能とされてきた傑作『下谷万年町物語』を、28年ぶりに物語の舞台である浅草の地で、地元町会・観光連盟・商店街等様々な方のご協力を得て実現させました。

【開催状況】

仮設テントで全国各地を回る劇団唐ゼミ☆が今回選んだ会場は、作品の主な舞台である浅草にある人気の遊園地「花やしき」の裏手スペースです。今回の公演のために昭和23年の町並みを再現した世界に唯一の特設テントが浅草の地に登場しました。会場である特設テントまでの通りには、浅草にある18店舗に協賛いただき設置した提灯が飾られ、通りが明るく照らされました。今回の公演にご協力いただいた店舗などを紹介する「浅草おすすめMAP」を制作し、お客様に配布、作品の舞台である浅草を一緒に盛り上げる工夫もありました。物語は昭和23年。上野と鶯谷の真ん中に位置する下谷万年町は、住みついた男娼たちでにぎわい、電蓄からタンゴの曲が鳴り、ハエの飛び交う八軒長屋造りの町。ある日、上野を視察していた警視総監の帽子が盗まれてしまいます。犯人は不忍池の雷魚と呼ばれるオカマのお春率いる一味らしく、お春のイロだった青年・洋一が帽子を持って逃走。それを追う破目になったのは、洋一と同じ6本目の指を持つ不思議な少年・文ちゃん。

公演の様子

洋一と文ちゃんが出会った時、瓢箪池の底から男装の麗人、キティ・瓢田が現れます。彼女は戦争中にはぐれた演出家の恋人（もう一人の洋一）を探していました。キティは、洋一、文ちゃんと共にレヴュー小屋「サフラン座」の旗揚げを決意します。それぞれの物語は、瓢箪池の中で時空を越えて交錯し、思わぬ結末に…！ 少ない数のメインキャストのほかに100人もの男娼（オカマ）役が登場し、大掛かりな舞台転換もあるため再演不可能とされてきたこの劇を、テントで上演するという試み。18歳〜69歳までの駆け出しの演劇人でチャレンジし、伝説の超大作を復活させました。

企画者からのコメント

舞台装置や出演者数など、どれをとっても今まで我々が公演してきた規模を大幅に上回っていたので、資金面に不安が残り助成を頂けたことは本当に助かりました。また、アドバイザーの方に様々なご助力を頂き、伝説の超大作を復活上演することができました！本当にたくさんの反響を頂き、その後も浅草花やしきさんに場所をお借りして公演を継続することができました。また浅草での公演を実績として、普段劇場としては使っていない場所をお借りして公演が打てるようにもなりました。現在も鋭意活動中です！

公演の様子

公演の様子

チラシ

photo by Kazuyuki Matsumoto

photo by Kazuyuki Matsumoto

Title
ダンス企画おやつテーブル「板間の間」

主催者
おやつテーブル

開催期間
2009.11.06—08

会場
ルーサイト・ギャラリー

ルーサイト・ギャラリー

ソロ、群舞、共演ミックスで送る、おやつな小品ダンスのショーケース

ダンス企画おやつテーブルは、20代から60代の年齢の離れた5人の女性ダンサーによるユニット。おやつ…いい響きです。おやつと聞くだけで心は躍り、できればおやつだけ食べて生きたい。そんな心のウキウキをダンスで発見したいという欲望のもと、おやつ的ダンスを目指して2007年に発足しました。年齢・芸歴も身体性もテクニックも様々なメンバーが、ソロ、群舞、共演ミックスで送る、おやつ的な小品ダンスのショーケースです。

【開催状況】

会場は、台東区柳橋のルーサイト・ギャラリー（旧市丸邸）。2001年秋に昭和の流行歌手、市丸（江戸小唄の市丸姐さん）の隅田川沿いの屋敷を改装し、オープンしたギャラリーです。公演に先立ち、ギャラリーの一階の応接室や和室で、ユニット名にちなんだ「おやつ」のおもてなしや、陶器を使った現代美術作家・フクモ陶器さんのユニークな作品（腕時計型の湯飲み等）を使用した創作茶道を行い、観客の方にも参加いただきました。二階の板間では5名のダンサーが白いシャツ、ベスト、ひだ付のチェックスカートといった、どこか制服のようにも見える統一された衣装を身に纏っています。板間にはガラスの引き戸で仕切られた広いベランダがあり、その先には隅田川、川面を行き来する屋形船、対岸の堤防、そして川を跨ぐ総武線の鉄橋が見えます。オープニングは、雨戸で閉め切った暗い舞台上、自身の顔、口、脚などを懐中電灯で照らし、身体の輪郭を断片的に浮かび上がらせるというパフォーマンス。また懐中電灯を口に突っ込み、口腔内で光が放たれ、頬がランプシェードのように内側から赤く照らされるという幻想的な演目も披露しました。その後は雨戸を開けて、隅田川を望むベランダも使用した開放的な空間で次々とダンスを展開しました。そしてダンサー2人の動きがシンクロした踊りや、メンバー全員で白く四角い包み（公演の最後にも登場）を次から次へと手渡していくといったパフォーマンスも。そのほかにも、イヤホンに収録された振付の指示を聞きながらメチャクチャな日舞を踊る、小さな箱から何十本ものリボンをひとつひとつ取り出し床に広げてゆく、生後数か月の赤ちゃんと踊る、巨大な食パン（前半に登場した四角い包みの正体）を5人全員で踊りながら食いちぎっていく、などのパフォーマンスを披露しました。公演終了後には、ポストパフォーマンストークを開催し、観客の方々から公演を観た感想や質問など活発な意見をいただきました。また、公演当日は、メンバー自らが探した柳橋界隈のお店を紹介する目的で制作した「柳橋界隈おやつ＋αな旅マップ」を配布し、大変好評でした。

photo by Kazuyuki Matsumoto
公演の様子

企画者からのコメント

サイトスペシフィックな会場でのダンス作品を作りつづけていましたが、支援制度を利用することで、視野を会場だけではなく町にまで広げることができました。実際に町を歩き、取材をし、町の方々とお話しをし、おやつマップを作ったことで、柳橋の歴史や横顔を知り新たな作品作りのアプローチを得ることができました。現在でも柳橋は私たちにとって（願わくば観客にとっても）知らない場所ではなく、愛着のある特別な場所です。地域とアートをより深く考察して取り組めるようになりました。

創作茶道の様子

公演の様子

チラシ